

https://de.wikipedia.org/wiki/L%CE%80%99arbore_di_Diana

ダ・ポンテ／ビセンテ・マルティン・イ・ソレール
《ディアナの木 L'arbore di Diana》
(1787 ヴィーン)

【登場人物】

ディアナ：純潔の女神（本名チンティア）、ソプラノ
アモーレ：愛の神、ソプラノ
プリトマルテ：ディアナの最初のニンフ、ソプラノ
クリツィア：ディアナのニンフ、メゾソプラノ
クロエ：ディアナのニンフ、メゾソプラノ
シルヴィオ：羊飼いまたは狩人（後に司祭アルチンドに変えられる）、テノール
エンディミオーネ：羊飼い、テノール
ドリスト：羊飼い（ディアナの庭を守るよう割り当てられた）、バス
合唱団（ニンフ、精霊、アモーレの側近）

【解説】

1786 年にダ・ポンテとマルティンによる《ウナ・コザ・ラーラ》がヴィーンでセンセーションを巻き起こした後、ヨーゼフ 2 世はダ・ポンテの別の台本を「この善良なスペイン人のために」と望んだ。演劇詩人は自分の創造性を証明するために夜はモーツアルトの『ドン・ジョヴァンニ』、朝はマルティンの『ディアナの木』、夕方はサリエーリの『オルムスの王アクスール』を同時に書いた。

ダ・ポンテによると、夕食をとりながらマルティンのオペラのタイトルを聞いた。劇のプロットはその後の 30 分で生まれ、その間彼はテーブルの仲間たちを放っておいでという。

ダ・ポンテは回想録の中で、3 つの台本に取り組んだことについて次のように報告している。
「私は机に向かい、中断することなく 12 時間そこにいました」。彼がベルを鳴らすと、16 歳の美しい少女が彼の部屋に入ってきた。

このミューズは、ある時は彼にクッキーを、ある時はコーヒーを 1 杯、またある時は彼女の美しい顔以外の何物でもなかったが、それはまさに「詩的な想像力を刺激し、機知に富んだアイデアを刺激する」ために作られたものだった。彼はこのようにして 2 か月間働いた。その間ずっと「娘のように愛したかっただけですが…」女の子は隣の部屋で彼のベルが鳴るのを待っていた。当時 38 歳の彼はこう付け加えた。「カイザーホフでは、この少女がこれらの 3 つの作品で私のカリオペであり、その後、私がさらに 6 年間にわたって書いたすべての詩のカリオペでした」。

63 日後、『ドン・ジョヴァンニ』と『ディアナの木』の台本は完成し、『アクスール』の台本は 3 分の 2 が完成した。ダ・ポンテの言葉によれば、マルティンのオペラでは、その名を冠したリンゴの木によって純潔が見守られているニンフたちは、ヨーゼフ 2 世の「聖なる布告」で「修道院という野蛮な制度」を廃止することによって自由を回復された修道女たちを彷彿とさせることを意図していたという。観客はまた、ディアナの道徳的厳格さとヨーゼフの亡き母である女帝マリー・テレジアの厳格さとの間に類似点を描いたかもしれない。

『ディアナの木』は同時に制作された 3 つの作品のうちの最初の作品として上演された。9 月末、ヨーゼフの姪であるマリー・テレザ大公妃の立ち寄りを機に、ラクセンブルク城劇場で試演が行われた。皇帝はダ・ポンテが台本を書いた意図を高く評価していたようで、僕約家として知られていたにもかかわらず 100 ドゥカーテンの特別手当を持ち帰らせた。

ダ・ポンテ自身の説明によれば、「伝説の純潔の女神ディアナの庭に、並外れた大きさのリンゴが実る枝の木がある」と想像したという。詩人はさらに次のように続けている。「ニンフたちが木の下を通り、行為も思考も貞淑であったとき、これらのリンゴは輝き始め、それらとすべての枝から、最も天国的で優しいメロディの音と歌が聞こえてくる。一方、そのうちの一人がその美德の神聖さを犯した場合、その果実は真っ黒になり、彼女の頭や背中に落ち、違反の重さに応じて彼女の顔を傷つけたり、凸凹にしたり、彼女の手足を折る罰を与える。しかし愛の神アモーレは自分の神性を侮辱するそのような行動基準を容認できないため、女装して庭に行き、女神の庭師をまず恋に落とさせ、すべてのニンフを恋に落とす方法を彼に教える。これだけでなく彼は美男のエンディミオーネを出現させ、ディアナ自身も最終的に恋に落とす」。ダ・ポンテによれば、生贊の最中に女神の司祭は「処女の領域」に違反行為があることを発見し、修道院共同体のために木の点検を命じたという。暴露されないように、修道院長が奇跡の植物を切り倒すと、光の雲の中に現れた愛の神アモーレは、ディアナの庭をアモーレの城に変えるように命ずる。

【第一幕】

リンゴの木のある壁に囲まれた庭園、背景に水域

第1場：ブリトマルテ、クリツィア、クロエは、ソファーに横たわって眠っているドリストの鎖を緩める。

第2場：アモーレが彼を起こすと、ドリストは木のリンゴを食べようとするが、阻止される。アモーレは自分の正体を明かし、ディアナへの復讐の手段として彼を選んだことを明かす。ドリストは生涯純潔を守りながら木を守るために彼女からこの島に誘拐されてきていたのだった。自然児ドリストはその任務についても知られ、憤慨してこう叫んだ。

ああ、チンティア（ディアナ）さんは確かに頭がおかしい！

私は木の切り方を知り、

すべての女性を誘惑し、彼女に、

島に、庭に火をつける方法を知るでしょう…

ドリストは木から身を守るためにアモーレから魔法の指輪を受け取る。

第3場：ディアナとニンフたちが小舟で到着する。彼らは、愛に対する免疫を持っていると思われることを祝う。しかし、ドリストは呪文を使っても免疫を得ることができない。その代わりに、この牧神の子孫であり、ボッカッチョの修道院の庭師は、ニンフへの愛を宣言してニンフたちを追いかける。ディアナがこのことで彼を叱ると、彼は彼ら全員に対して確固たる意志があると正直に宣言する。

あなたが望むなら、

私は夫というものになります。

あなたは私にあなたの心を捧げます、

私もあなたに私の心を捧げます。

私は長い間、女性の群れに

憧れていますが、

私の記憶が間違っているなければ、

ここでそれを見つけました。

罰として、ディアナはドリストを植物に変えてしまう。

第4場：エンディミオーネが飼い主のシルヴィオに恋愛運をもたらした犬を殺したので、シルヴィオは彼を殺そうとする。しかし、羊飼いの姿をしたアモーレによってそれを阻止される。愛の神アモーレは、ディアナがドリストを閉じ込めた木をシルヴィオが彫れば、その動物を生き返らせると約束する。これが実施されれば、植物は人間としての姿を現す。アモーレは別の彫刻で変身を元に戻す。ドリストが自分の運命を語った後、若者たちは小舟で逃げようとするが、小舟は勝手に去っていき、アモーレは三人〔ドリスト、エンディミオーネ、シルヴィオ〕を笑い飛ばす。

第5場：ディアナが水浴している間、ブリトマルテ（初演では表情豊かなフランス人女性マリア・マンディーニ）が、ためらう仲間〔クリツィア、クロエ〕や若者〔ドリスト、エンディミオーネ、シルヴィオ〕たちに、6人で羊飼いの時間を設けようと提案する。

私は優しくて新鮮で、

元気と活力を持っています。

私も恋愛して

みたいです

ブリトマルテはシルヴィオを恋人として選ぶ（ブルネットが最も忠実だから）。

第6場：ディアナが近づいているとアモーレが警告すると、ブリトマルテは若者たちを洞窟に隠す。

第7場：アモーレは、自分自身の使者を装って、ディアナに要求を出す。つまり彼に服従し、木を切り倒し、ニンフたちが愛し合うことを許可するようにという。怒った女神ディアナは愛の神アモーレを恐ろしい暴君と呼ぶ。一方、アモーレはニンフたちの喜びを称賛し、ディアナにはニンフたちが不誠実であることを告げ、彼女を洞窟に連れて行く。

第8場：発見されたニンフたちは恐怖で身動きができない。アモーレは復讐を宣言しする。
しかしディアナは、アリア「私は神性を感じる Sento che dea Son io」で、差し迫った敗北に再び反抗する。

第9場：アモーレは羊飼いたちに女神が好きかどうか尋ねる。誰もが「はい」と答え、シルヴィオがディアナの美しさについて歌うと、彼はシルヴィオとエンディミオーネにそれぞれ矢を与える。その矢で純潔の化身に傷を負わせた者は彼女の愛を享受するであろう。

第10場：両性具有的神アモーレは、手ぶらで帰ってきたドリストに、あなたを自分で選んだと告げる（後に示されるように、司祭として）。二人はエロティックなデュエット「いたずらな小さな目 Occhietto furbetto」を歌うが、これはおそらく多くの聖職者の同性愛への暗示であろう。

第11場：ドリストはまたリンゴを食べたいと思っている。そこにディアナと彼女のニンフたちが弓で武装して突入り、侵入者と不従順な衛兵を罰する。

第12場：アモーレはバラの盾でドリストを守り、攻撃者たちに対し自ら撃つことを敢えてする。
これによりニンフたちは凍りつき、ディアナは後退する。

第13場：アモーレから受け取った矢でディアナを傷つけたシルヴィオはひるむ。

第14場：一方、エンディミオーネは女神の心臓を射てる。彼女は復讐を誓う。

【第二幕】

ディアナ神殿

第1場：ブリトマルテは3人の若者を解放する（そしてキスする）。彼らは今、「愛の責任があるこの恐ろしく残酷な島」を早く去りたいと考えている。これは、ドリストが「この世界に、単に恥ずべきでなく、恋人や愛に対して敵対的な女性がいるということ」を信じられないという事実にもかかわらずである。

第2場：ディアナはブリトマルテを追跡し、他のニンフに不服従者を罰するよう命令する。しかし、男たちが慈悲を求めるとき、彼女は自分の心が和らぐことに驚く。

第3場：若者たちはアモーレが彼らを昏睡状態から解放するまで動けなくなる。彼の指示に従い、エンディミオーネは残り、ブリトマルテは言葉を失い、シルヴィオとドリストとともにディアナの噴水へ向かうことになった。

第4場：ディアナはエンディミオーネに、他の人たちのために死ぬようにと告げる。彼は、彼女の美しさと容赦のなさが彼を殺していると答える。その後、女神は彼を撃つことができなくなる。クリツィアも刑を執行することができない。彼女の愛人は、彼女の崇拜の司祭にアドバイスを求めたいと考えている。

第5場：アモーレは、ダイアナを罰するだけでなく、自分自身と他の神々を楽しませたいと宣言する。

小さな森

第6場：クリツィアとクロエは自分たちの不服従を後悔し、エンディミオーネを殺すことを決意する。しかし、シルヴィオが彼の弁護に現れ、ニンフたちは逃げ出す。若者二人は安全な場所に逃げようとするが、エコー効果のあるアモーレに混乱させられる。やがて彼らは若者を憐れみ、幸せな将来を約束する。

噴水の家、洞窟

第7場：ドリストは、口のきけない女性と結婚するという考えに興奮し、ブリトマルテに求愛します。その結果、やって来たアモーレは不誠実な「新郎」を平手打ちする。

第8場：愛の神アモーレはブリトマルテを嘆める状態に戻す。

第9場：ディアナは神殿に行く前に水浴する。一方、アモーレは噴水の碑文「チンティアがここに君臨する」を「ここにアモーレが君臨する」に書き換える。彼はニンフや羊飼いたちとともに、差し迫った勝利を祝った。眠っているエンディミオーネは一人残される。ディアナが水浴後コートを着ると、この美しい羊飼いに目が止まる。彼女が起こすと、彼は夢を見ているのだと思う。二人は愛について歌う。

第10場：シルヴィオは、アモーレがライバルに対する勝利を奪ったと非難する。

第11場：愛の神アモーレは彼を老司祭アルチンドに変える。

第12場：ドリストはブリトマルテ、クリツィア、クロエに追われ、結婚の約束を思い出させられる。彼が選びたくないと言えば、彼らは彼を殺すと脅す。しかし、アモーレは彼を解放する。

第13場：ディアナとエンディミオーネは愛を楽しんでいる。

第14場：突然「司祭」の声が聞こえる。女神は重い心で、愛する人たちと別れるよう命じる。アルチンドを装ってシルヴィオは彼女の告白を聞く。エンディミオーネの美德に疑問があるという口実で、彼はディアナにニンフを神聖な木の下に集めるように命令する。

第15場：アモーレはニンフたちとともに勝利を祝う。

第16場：エンディミオーネは恋人の失踪に取り乱している。皆で木のところへ行く。

第一幕の書割、その後アモーレ城

第17場：「司祭」がくじを引き、これにより、ディアナが最初に木の下に行かなければならぬことが決まる。女神ディアナは平静を失い、自らが非人道的な撻を破ったことを他の人々に明かす。嵐が起こり、大地が揺れる。ディアナは復讐を求め、次に慈悲を求める。彼女の庭が消える。その代わりに、アモーレの城とアモーレス自身が凱旋戦車に乗って登場する。彼は色恋沙汰の解決を発表する。一夫多妻制のドリストはブリトマルテ、クリツィア、クレオとともに城の衛兵として同居し、シルヴィオは愛の神の司祭となり、ディアナはエンディミオーネと手を組むことになる。アモーレは結婚式の神イメネオに現場を任せる。ディアナは敗北を認める：

力強い神よ、その手のひらはあなたのものです。
すべての魂はあなたに委ねられ、
すべての心はあなたに服従します。

他の全員も同意する。

【公演の成功】

5年間で65回の公演を行った《ディアナの木》は、ダ・ポンテとマルティンにとってブルク劇場における最大の成功であった。その後、マドリッドからモスクワ、ミラーノからロンドンまで40以上の上演が制作され、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、ロシア語に翻訳された。

【モーツアルト作品との関係】

《ディアナの木》は、ダ・ポンテとモーツアルトによる《コシ・ファン・トゥッテ》(1790年)のモデルとして説明される。シカネーダーとモーツアルトの《魔笛》(1791年)では、侍女たちと夜の女王はニンフたちを連れたディアナ、ドリストはパパゲーノ、彼の無言の罰はブリトマルテの無言の罰、そして知恵の神殿への妨害者の攻撃はディアナ島へのアモーレの攻撃を彷彿とさせる。